

令和五年度

学校推薦型選抜Ⅰ

医学部保健学科看護学専攻

## 小論文（和文）

- ・開始の合図があるまで、表紙は開かないでください。
- ・問題用紙は、一枚です。
- ・解答用紙は、一枚です。
- ・下書き用紙は、一枚です。
- ・開始の合図があつたら、解答を始める前に、問題用紙と解答用紙の各枚数を確認してください。
- ・解答は全て解答用紙に記入してください。
- ・受験番号と氏名を解答用紙に必ず記入してください。
- ・問題用紙と下書き用紙は、持ち帰って構いません。

# 令和五年度 学校推薦型選抜 I 小論文 (和文) 問題用紙

問題 次の課題文を読んで、設問に答えなさい。

「共感」という日本語は、英語の empathy, sympathy, compassion, synesthesia などに充てられる翻訳語であるが、ヘルスケアの分野では、このうち empathy を「共感」と訳し、sympathy を「同情」(あるいは「同感」と訳して、両者の違いに関心が注がれ、共感こそがヘルスケア専門職に必要で、同情は有害であるとさえ論じられてきた。

その際、共感とは病者の苦痛が(当人にどう感受されているか)を理解しようとする態度であり、同情は(自分が患者の立場に置かれたらどう感じるか)を考える態度だとされる。共感とは相手の苦痛を本人の主観で評価するのに対して、同情は自分の主観によって評価する。それゆえに、同情は自己本位の評価になり、過度な情動反応が生じてケア者が疲弊し、燃え尽きるリスクをもっているという。

しかし、この区別はかなり曖昧なものである。共感とは相手の主観で評価することを理想とするが、(他者の眼で見ることは実際には不可能なので、何かを参照するほかはない。その参照すべきものが何であるのが重要なのだが、それが簡単には見つからない。

最も考えやすいのが、自分がこれまでに経験した類似の出来事や、そのときに抱いた感情などだろう。夫を亡くして茫然としている人を前にして、自分がかつて幼い息子を失ったことを思い出す。しかし、それを持ち出すと、自分の主観に引き寄せて評価する同情と、どこが違うのかが分からなくなってしまう。

この問題は、脳科学や動物行動学などの分野でも盛んに研究がされている。たとえば、人間やサルなどの霊長類の脳には、ミラーニューロンと呼ばれる特別な神経細胞があつて、他個体の経験を目の当たりにしたときに、あたかも自分がその行動をしているかのような反応が生じることが分かっている。仮説としては、こうした脳内のしくみが、共感と利他的行動(他個体の利益を優先し、ときには自己犠牲も厭わなような行動)の身体的基盤になっていると見なされている。

しかし、今日の脳科学では、共感や利他的行動が生じる際に、脳のどの部位がどんなタイミングで活性化されるかは解明できても、(夫を亡くした人がいま感じている悲しみ)と、その人を前にした(ケア者が、かつて息子を失ったときに感じた悲しみ)とが、同質のものかどうかを証明することはできない。脳内のまったく同じ部位が同じように活性化するとしても、本人が主観的に感じているもの(クオリアと呼ばれるもの)が同質のものであるのかどうかは、いまの脳科学の手法では解明できないのである。

出典 「対話と承認のケア ナラティブが生み出す世界」

(著者 宮坂道夫、医学書院、二〇二〇年二月十五日 第一版第一刷発行)

注 出題に際して、原文の一部を改変している。文献引用の注は省略した。一部の語句については、傍点を除いた。

